二次元ぷち文庫
2D PETIT POCKET NOVELS
剥かれた競泳水着
生徒会長・常盤咲穂の受難
草飼晃
表紙イラスト：秋月からす
試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『剥かれた競泳水着　生徒会長・常盤咲穂の受難 前編』
『剥かれた競泳水着　生徒会長・常盤咲穂の受難 後編』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

剥かれた競泳水着

生徒会長・常盤咲穂の受難

草飼晃
表紙／秋月からす

二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

常磐咲穂（ときわさきほ）

競泳部に所属する凛とした生徒会長。最近、剣道部の主将とつきあい始めたがまだ処女。水泳で鍛えたぴちぴちのおっぱいと太ももの持ち主。

志木蘭子（しぎらんこ）

学園理事長の姪。巨漢で性格も良くないが、金の力を巧みに使って一部の生徒を自分の味方につけている。

黒田（くろだ）

咲穂に憧れていたラグビー部員の男子。

じめじめと暑い午後だった。

「ちょっと顔貸してくれるかな。すぐ済むからさ」

急に声をかけられたので、常盤咲穂は競泳用水着の上に学園のジャージを羽織っただけという姿だった。

力士並みの巨体の不良女子生徒に連れ出されたのは、敷地の外れにある運動部室棟。学園の通用門からいったん外に出ないとたどり着けない。

ラグビー部室はいちばん奥に建てられているプレハブだった。

すぐ裏はもう雑木林だ。

均整の取れた百五十九センチの肢体に実るEカップバスト。その胸の奥に漠然とした不安を感じながら常盤咲穂は尋ねた。

「ねえ志木さん、ここでなければできない話って、いったいなんなの？」

「別に難しい話じゃないさ」

志木蘭子はふてぶてしい態度でそう答えると、ぱんぱんと手を叩いた。

それが合図だったようだ。

ラグビー部室の扉が音を立てて開き、中からラグビー部員たちがぞろぞろと姿を現して、咲穂を取り囲んだ。

十人以上いる。

どいつも大柄だ。
練習もしないで部屋の中でたむろしていたのか。全員がTシャツ姿かランニングシャツ姿だった。下は学生ズボンの奴もいればショートパンツという奴もいる。いや。
(ちょ、ちょっと、やだ)
ショートパンツのように見えるのはトランクスではないか。
(男の子の……下着じゃないの)
狼狽する咲穂を前にして、誰も口をきこうとしない。
ただニヤニヤ笑い、下卑た視線を水泳部エースの肢体に注いでくるだけ。
ゾッとしつつ咲穂は不良女子生徒に訊いた。
「これはどういうことなの、志木さん?」
「どうもこうもないわよ。言いたいことは一つ」
志木蘭子は丸太のように太い足を一歩踏み出した。凶悪そうな面構えのラグビー部員たちは、女番長然とした不良女子生徒のために場所を空ける。
「あのね、常盤さん。アタシもさあ、宮脇(みやわき)クンのこと好きなんだよね」
「え……?」
黒い宝石のような瞳で不良女子生徒を見つめたまま、咲穂は美麗な細い眉を寄せた。
常盤咲穂は学園の二年生。

水泳部員であり、トップ当選した新生徒会長でもある。
肌は淡く陽に灼けて健康的な光沢をツヤツヤと放っている。染色や脱色など一度もしたことのない清楚な黒髪は今は束ねてある。
鼻すじや、ふっくらとした小さめのくちびるには、まだ少女のあどけなさが残っている。くびれた胴にもまだ、花開く前の乙女の硬さがあった。
けれど、それ以外はもう充分に発育していた。
スリムな肢体には不釣り合いなほど乳房は大ぶりだ。たっぷりと若さを漲らせ、前に向かって突き出している。
腰骨とお尻もまた見事に発達し、女らしさを匂い立たせている。
太ももの肉づきもよい。水泳部の練習で鍛えているせいか余分な肉のゆるみはなく、引き締まった肌が成熟しきったムチムチの中身をぴっちりと包みこんでいる。
ラグビー部員たちの無遠慮な視線が、そんな胸やお尻や太ももに突き刺さってくる。
肥満体の不良女子生徒はフンと鼻を鳴らしながら言った。
「生徒会長さん、あんた、宮脇クンとつき合ってるんだろ？　けどさ、宮脇クンにはアタシの方が先に目ぇつけてたんだよね。だからさ、あんたには彼のこと、諦めて欲しいってわけ」
「そんなこと言われても、困るわ」

ラグビー部員たちに囲まれているという怯えを押し隠し、咲穂は志木蘭子にきっぱりと答えた。

宮脇という男子は剣道部の主将だ。

咲穂はずっと片想いしていた。なかなか気持ちを打ち明けられずにいた。ところが先月、宮脇の方から告白してきた。

二人はつき合い始めたばかり。この前のデートでやっと、手をつないだところだった。

「わたしと宮脇くんがおつき合いしていることは、否定はしないわ。でもわたしたちの関係を、他の人に指図されても困ります」

「そう言われてもねえ。アタシは昔っから諦めだけは悪くてね」

ところでさあ、と樽体型の不良女子生徒は言ってニヤリと笑った。

「ちょっと訊きたいんだけど。あんたひょっとして、まだバージン？」

「え？」

咲穂はどぎまぎしてしまった。

「そ、そんなこと、志木さんに関係ないでしょう」

その答え方だけで蘭子は、咲穂が処女だと見抜いたようだった。

「ねえ生徒会長さん。あんた、傷モノになったら、自分から宮脇クンのこと、諦めてくれっかな？」

「なんですって？」
「そのきれいな身体を他の男子にザーメン漬けにされたら、宮脇クンに捧げようっていう気はなくなるんじゃないかなって思ってさ」
蘭子はパチンと指を鳴らし、一歩退く。
逆にラグビー部員たちは足を踏み出してきた。
「ぐへへへ。咲穂ちゃあん」
「生徒会長よお。おれと楽しもうぜ」
咲穂は、あわてなかった。
さっと身をかわし、伸びてきた相手の腕をつかんだ。
「やあっ」
自分の身体を前に傾けて投げ飛ばす。そいつは咲穂の背中の上で一回転してから地面に叩きつけられていた。
「な、なんだ、こいつ」
「……強えぞ」
男子生徒たちは驚きながらもまたジリジリと包囲にかかる。
追いつめられた咲穂の視界に、部室の外壁に立てかけられた竹箒が入った。
何本かあるうちの一本は、破損してただの竹の棒になっている。

咲穂は飛びかかってきた奴を避け、素早くそれを手に取った。
「胴ーっ！」
凛とした声が響き渡る。
咲穂は父親から剣道と合気道を仕込まれている。それ以上に泳ぐのが好きだから水泳部に入部したが、剣道の実力では全国レベルだろう。
一人のラグビー部員の横腹を竹の棒で打った。
「えーいっ」
もう一人の部員の腕を叩いた。
面を決めてやれば相手は昏倒していただろう。しかし咲穂には、防具をつけていない相手の頭を攻める非情さはなかった。
「あんたたち、何いつまでもモタモタしてんのさ！」
志木蘭子が小石を拾って投げつけてきた。
「きゃっ」
咄嗟に避けたが、蘭子は咲穂の顔に向かって次々と石を投げてくる。
うずくまって顔と頭を守るしかなかった。
「さあ、あんたたち。早く！」
「よっしゃ。同時に飛びかかれっ」

捕獲のチャンスをラグビー部員たちは逃さなかった。

＊

咲穂は仰向けにされていた。

ろくに身動きできない。

四十八キロしかない咲穂が、男子生徒たちの人数と体重にかなうはずもなかった。

（ううっ……！）

手首も足首もしっかりと握りしめられていた。両腕は頭の上、足は肩幅くらいに広げられた状態だ。

ちょうど『人』という字のかたち。

ラグビー部員たちの粘ついた視線が、競泳用水着に守られた咲穂の肢体に、まるで濁った桃色のゼリー状触手のようにからみついてきている。

「アタシさあ、あんたのこと前からきらいだったんだよね」

乙女の気品と早熟な悩ましい曲線を兼ね備えた肢体を見下ろしながら、志木蘭子が言う。

「ちょっとかわいくてスタイルもいいからってさ、あんまり調子に乗らない方がいいと思うよ」

ラグビー部室の中は汚れきっていた。

もう何年も掃除をしていないのだろう。

あちこちに綿くず状の巨大な埃がある。プレハブの内壁には赤錆が浮いている。敷かれた畳は擦り切れた上にどす黒くなっている。それどころか畳と畳の隙間から雑草が顔を覗かせていた。腐った野菜のような匂いの空気を扇風機がかき回している。

咲穂は口は自由だった。

「だっ……誰かあーっ！　誰か来てーっ！」

「無駄無駄。このラグビー部室が学園番外地って呼ばれてるのは知ってるでしょ？　ノコノコついてきたあんたが悪いのさ」

十畳くらいのプレハブ部室の東側と西側に窓があったが、東側は後から建てられた体育器具倉庫に隣接しているので塞がっていた。西側の窓から射しこむ夏の光に、もうもうと舞い上がる埃が浮かび上がっている。

「ねえ生徒会長さん。宮脇クンをアタシから奪おうったってさ、そうはいかないんだからね」

「……奪うだなんて、そんな。言いがかりだわ！」

「アタシがあんたの口から聞きたいのは、宮脇クンのことは諦めますっていうことばさ。それだけ聞ければ、あんただっていやな思いはしなくて済むんだよ」

咲穂の手足をおさえつけている男子は四人。

どいつも顔や手に血を滲ませている。咲穂が噛みついたり引っ掻いたりして最後の最後

まで抵抗しつづけたせいだ。
残りの奴らは蘭子のななめ後ろに、下僕のように控えていた。
スポーツで更生させるという校長の意図からつくられたラグビー部。だが指導しようとする教師はおらず、結果的に不良生徒の溜まり場となっていた。
蘭子は志木財閥の一人娘。学園の理事長の姪でもある。金の力と立場を巧みに利用して、不良男子生徒たちを自分のコントロール下に置いているようだった。
「ひとことアタシに約束してくれたら、すぐ部活に戻っていいんだよ。それともあんた、犯(や)られたいの、こいつらに？」
濃紺の競泳用水着は、咲穂が学園に入学し、水泳部に入ってすぐ購入したもの。この一年で乳房とお尻の張りや量感が増していたので、生地ははちきれんばかりになっている。股間には軽く痛みをおぼえるほどに布地が食いこんでいる。そんな姿を間近で見られているだけでも充分恥ずかしかった。
しかし。
咲穂はそれを押し隠して蘭子に口答えした。
「約束なんて、何もできないわ！」
「ふうーん、そう。じゃあいいわ。みんな。少しかわいがってあげなさい」
「い……いいんだな蘭子さん？」

答えられなかった。
またイッちゃう、とは言えなかった。
咲穂はこの後すぐに、オナニーで経験していた淡い絶頂など絶頂のうちには入らない、ということを思い知らされることになる。控え目なオナニーでのぼりつめるのと、男の子たちの手や大人のおもちゃでもてあそばれるのとでは絶頂の高さがまるで違うのだということを。
しかし、この時にはまだそれがわかっていなかった。
「し、志木さん。わたし、あなたを軽蔑するわっ。わたしがあなたの思い通りにならないからって、こんな卑怯なことをするあなたを、わたしは、許さないわっ」
「ふうん。まだそんな口きくわけ？　イッたくせに生意気ね。まあいいわ……彩藤クンも、これを使ってあげて」
蘭子はまたポケットからローターを取り出し、今度は下半身に取りついている不良生徒に渡した。
「へっへっへー」
その男子は、愛液に濡れた水着の股間部分にローターを寄せてくる。
「やっ……それ、もういや」
ジーッと音を上げて振動するローターが、やわらかい肉でできた亀裂を割り、水着の生

試読み
エッちシーン
ここから
スタート!

地ごと擦りつけられた。ほかほかと火照る膣口が布地を挟んでローターを半分呑みこまされる。

「ひゃああんッ」

膣口は初めての異物に驚いてヒクつき、腰がまた勝手に浮き上がった。

「これも使ってあげて」

さらにもう一つ、新たなローターが襲いかかってきた。水着繊維の下で勝手に剥き上がってしまっていたクリトリス包皮の付け根の上を滑るように動いた。

一瞬目の前が真っ白になる。

ふわっ、

「……んッ」

と身体が宙に浮く感覚。数秒間意識が飛んで、またイッた？　と、そう思った。

違った。それはまだ昇り曲線の途中だった。次の瞬間。

（えっ。え？　えっ？　……ンああっ！）

最も敏感な肉真珠に真上から触れられていた！

「くうああッ！」

今度は一瞬どころではなかった。意識が真っ白に塗りつぶされたまま一秒、二秒、三秒……時間が過ぎていく。仰向けのまま背中が限界近くまでのけ反った。股肉のひだの狭間で熱い処女蜜が噴き出た。一回繁吹いただけではなかった。腰の弾みに合わせるように水着の中で、どっ、どっ、と派手に蜜が吐き散らされる。五秒、六秒、七秒……意識は少しだけ元に戻ったが、絶頂はまだおさまらない。

「やああっ……それ、いつまでも、押しつけないでッ……離して……離してッ」

ローターはクリトリスの上から離れず、右から、左からと、少しずつ角度を変えて何度も責めてきた。ぷりぷりに漲りきった処女の肉真珠にはローターの刺激は、水着を挟んでいても強すぎた。

「それダメ……わっ、わたしっ、ま、また。くふぅあああぁぁッ！」

白い喉元が全員の目に晒され、嬌声と唾液が噴き上がる。

男の子たちに群がられたままの身体がビクンッ！　とまた弾んだ。

「くうっ」

ぶしゅっ！

とうとう、水着のクロッチを突き抜けて失禁したように愛液の飛沫が飛び、プレハブ部屋の畳を濡らした。咲穂はもちろん見たことはなかったけれど、それはまるで男子の射精そっくりの濃さと勢いだった！

ツーン……とオーデコロンでも振り撒いたように媚臭が立ちこめる。
ブリッジみたいな姿勢はまだそのまま。
（ま、また何か出るッ）
ぶしゅ！　ぶしゅしゅしゅ！
（おっ、おかしくなるぅ……わたし、おかしくなるぅ！）
なかなか波は遠のいてくれない。
競泳用水着の裏地の下でクリトリスは張りつめきり、微振動の刺激を受けるたびに甘い爆発が起こって、咲穂は喉を震わせる。
（どうしてこんな……び、敏感、すぎる……ッ！）
ぶるっ！　ぶるんっ！　すっかり蜜にまみれてしまった鼠蹊部が、強張ったまま揺れ動いていた。
「おい、すげえな、咲穂ちゃん。イッてるんだろ、これ？」
「やらしかったんだ会長。でも普通こういう、おれたちにレイプされるかも的な状況でイクかな？　咲穂ちゃん、女子的にはちょっとやばくねえ？」
ラグビー部員たちと志木蘭子がなかば呆れて見つめるその前で、咲穂の背すじと太ももはビックンビックンと揺れ動きつづけた。絶頂は未経験の長さだった。もうかれこれ十六秒、十七秒……。

（う、嘘お。お、降りられないよおおお……っ）
紅潮した頬の上を熱い涙が這う。発汗はもう全身に及び、内部から濡れた水着の生地は、十代の早熟の肢体にぴっちりと張りついてしまっていた。
「これも使ってあげな」
蘭子が男子生徒に渡したのは、今度はボールペンだった。
「へ？　こんなもので効果あるんすか？」
「ローターもいいけどさ。こういう日常的なモノでいたずらされて感じちゃう方が、恥ずかしいんだから。ウフフ」
水性ボールペンではなく昔ながらの油性ボールペンだ。武骨ささえ感じさせる先端のボールが、油ぎった黒いインキにまみれてギラリと光る。
他の男子たちは気を取り直したようにまた口を寄せたり、指を這わせたり、ローターを当てたりし始めていた。
まだ余韻が終わっていないのに！
（ち、違うかも……よ、余韻じゃないよ、これ……まだイッてる、わたし……）
もう二十秒以上つづいてる……。
「うわあ。咲穂ちゃんの乳首、かっちかっちになってる！　やべえよこれ」
「咲穂ちゃんの震えてる太もも、おれの手のひらに吸いついてくるっ！」

「ようし、じゃあおれはこっちの乳首ちゃんを、これで」
乳首の先端を、キャップを外したボールペンの先端でコリコリとなぞられる。
「ひ……ひい、なぞるのイヤ！　ちょっと、お、押すのイヤッ！」
一方、ローターを持った奴はそれを巧みに操作して、競泳水着少女の敏感なところをしつこく攻撃してくる。高い頂から戻ってこられないでいる咲穂にとって、それは責め苦ですらあった。
「咲穂ちゃんっ。クリトリス、かたちがはっきりわかるぜ。大豆みてえだな。それにこの硬い感触！　お！　でも、硬いけど、ぷりっぷりしてるぜ！　うまく当てないとローターが跳ね返されそう！」
「いやあっ、それ、もう、いやあっ！　ちょ、ちょんちょん、当てちゃイヤッ！」
三十二秒。三十三秒……。
「い、い、今、ほ、ほ、包皮が、戻らなくなってるから、それダメなの！　はううッ」
カンフル剤を直接注入されたかのように腰が、ビクッ！　ビクビクッ！　と弾んだ。
眉をぎゅっと寄せて、小さな鼻腔をいっぱいにふくらませて、それ以上の声だけは出すまいとする咲穂。水着の胸のふくらみはますます男の子の唾液に濡れ、その頂点は相変わらず苺そっくりのかたちを浮き上がらせてヒクヒク震えている。
濡れそぼつクロッチからはなおも、

「……くっ、くッ！」
どぼっ！　ごぼっ！
まるで排尿同然の蜜噴きがつづいていた。
「ねえ。何が戻らなくなってるって？　ねえ、咲穂ちゃん。もう一回言ってよ」
「包皮って何、咲穂ちゃん？　それなんのこと？　教えてよ」
「言えないの？　まあいいさ。だってわかるもん。クリトリスだけじゃなくて、元に戻らない咲穂ちゃんの大事な包皮の輪郭まで、ハッキリ浮き上がってるんだぜ、なあ咲穂ちゃん！」
男子が口々に嘲笑する。
蘭子も調子を合わせて罵ってきた。
「会長さんさあ、ひょっとして、毎晩包皮剥き上げてオナニーしてるの？　スケベだったのねえ。みんなに人気のある生徒会長なのに。みんなガッカリするわねえ。夕べもしたの？言いなさいよ。宮脇クンのこと考えてそのぷりぷりのクリトリスを擦ったんでしょう？」
「ちっ、違う……わ、わたし、そこまではまだしたことなか……ッ」
答えかけた矢先、もう一度肉真珠にローターを擦りつけられた。しかも。
左右から二つ同時にだった。挟みこむようにだった。
「……もうダメッわたしっ！」

ダブルの微振動に絶頂感がいっそう突き上げられる。真っ白い閃光が幾度も視界を埋め尽くし、ふくらみきったクリトリスが水着の内側にざりっと擦れて、まぶたの裏で火花が散る。

「はああうッ」

びくんんッ！

今度はたおやかな肩と漲った腰骨も震わせていた。

両の太ももが伸びきって、攣ったようにヒクついた。

膣肉から分泌したトロトロの牝シロップが、まだ未熟さの残る膣口を内側から割り開いてどっ！　どっ！　と噴き出す。そのたびに強烈な快感の波が均整の取れた肢体の持ち主をさらなる高みへと押し上げていく。

（やだああ。わたし、こんなの初めて……ッ！）

変なおもちゃでいたずらされるだけで、こんなにおっぱいの奥やお腹の奥の方が切なくなっちゃうだなんて……。

咲穂は、ふと思ってしまった。こんなにいいんなら自分も今度こっそり注文しちゃおうかな、と。さみしい夜にはそれを使えば、もうさみしくないかもしれない、と。宮脇くんのことを考えながらそれを使ったら、しあわせな気持ちになれるかもしれない、と。

（ば……ばか！　何考えてるのよ、わたしったら！　そんなのダメ、絶対！）

「まだイッてるの？　咲穂ちゃん。身体中ひくんひくんさせて。イッてるの？」
「ちっ、違う……そんなんじゃ、ない……ああ、また、くふッ、くうぅっ、くふウ！」
実際はあれから六十秒以上、ずっとアクメがつづいている。
きゅ、きゅ、きゅ！
敏感になりきった乳首とクリトリスは咲穂が身体を震わせるたびに、水着の裏地に擦れてそんな音まで上げるようになっていた。
「お、おかしく、なる……おひなさま、す、擦り切れちゃうううう……ふうううッ！」
「おお、またイッてる？　それともずっとイッてんのか？」
「おひなさまって、クリトリスのこと？　もう咲穂ちゃん、いちいちヤバすぎ」
「女の子ってイクのこんなに長えの？　ねえ蘭子さん」
「アタシに訊かないでよ。知らないわよ。アタシは会長さんみたいに浅ましくはないから」
蘭子はわざとらしく苦笑い。
その男子は今度は咲穂の顔を覗きこんだ。
「ねえ咲穂ちゃん。どうなの？　ひょっとして今もイッてるの？」
「違うったら、違う……わたし、絶対、そんなんじゃないんだから……あ！　あ！　ぐっ！　うっ！」
理性を押し流して激感が何回も何回も炸裂しつづけている。絶頂をきわめた、ともう幾

度も思っているのに、発作は繰り返すばかりでなかなかおさまろうとはしない。
……七十九秒。八十秒。八十一秒……。
「……むっ……むぐッ……む、むううっ……」
声だけは出すまいとするから、かえって男の劣情をそそるようなくぐもったアクメ声になってしまうのだが、咲穂自身にはそれはわからないことだった。
異性を挑発するかのように勝手にふくらんでしまったEカップの乳肉果実が、異性の目を楽しませるかのように勝手に波打つ。
（ま、まだイク！　だっ、ダメなのにっ！）
……九十秒。九十一秒……。
「こう、咲穂ちゃん？　この角度がいい？　もっとチョンチョンして欲しい？」
「わたしいやだから、それもう絶対わたしダメだから……むふぅ……むっ、むぐふッ……んムッ……んムうッ！……」
（やだ、こわい……わたし、もう、これ以上は、こわい……こわいよお）
……九十九秒。百秒……。
「こ、こんなことって……むふうッ！　むふふうッ！」
（やだ！　やだあ！　もうイヤ！　こ、こんなすごいの初めてだよお！　やだよお！）
厚く腫れたようになったまぶたがヒクヒクとおののき、目尻から随喜の涙がしたたり落

ちる。股布の内側で蜜がまた飛沫を上げる。ぷーんと強い牝の香りがぬらぬらの股布から立ち昇った。

「うへへへ。咲穂ちゃあん」

「やっ、もうダメ、ダメなのわたし……い、今腰を、こ、擦らないで！　胸揉まないで！　み、耳の後ろをくすぐらな……あッ、ふわあああっ……むぐぐぐふッ！」

……百五秒……。

（お、終わらないよおっ！）

それに。みんなにずっと見られてる……！

「みっ、見ない、で……くふうぅッ……ッ！」

二つの小さな鼻腔がいっぱいにふくらむ。こらえきれないうめきといっしょに熱い息が蒸気のように洩れてしまう！

「おい、まじでイッてるのかよ、咲穂ちゃん？　水着のまんまで！　ちょっとやべえだろ！　おれらみたいな男に群がられるのが好きだったってのか？」

「なあ咲穂ちゃんっ。バージンなのにこんなにエロい身体なの？　それともバージンだからこんなにエロい身体なの？　ねえ答えてよ！　オナニー歴何年？」

「しっ、知らない……わ、わたし、わたし、もう、おかしく、なっ、ひうぅッ！」

蘭子が冷酷に指示を出す。

「その、ぷっくり浮き上がったクリちゃんの先っぽをボールペンで押し潰してあげなさいな」
「ようし！」
「やだっ、やだっ、そんなのやだ……ほんとにっ、そんなことっ、しないでッ！」
剥き上がったまま、クリトリスはどんぐりの実のようにコチコチになっていた。水着の裏地に当たっているだけでも刺激が強すぎるのに。ローターを擦りつけられるだけでも身体がどうかなってしまいそうなのに。これ以上そこを責められては！
「ほらっ、どう咲穂ちゃん？」
くにゅ……。
「ひゃあッ！」
（かっ、身体中が、まだ！　全然終わってないのに！　退いていかないのにい！）
……百十秒。百十一秒……。
「お、押さな……むぅう！　むふぅう！」
蜜がまたごぼりと股布を濡らした。
……百十二秒……。
「……くぁうッ……！」
（き……気持ちよすぎるぅ！）

「あ……あ……いや……」
「いつまでも生意気に暴れてんじゃないわよ常盤！　アタシを本気にさせるつもりかい？」
志木蘭子はこめかみに青筋を立てていた。
両方の太ももが黒田にがっしりと抱え直された。
そそり勃つ男根が見えた。咲穂が初めて目にする男性器だ。
極太のさつまいもに椎茸の笠を乗せたような偉容。
刃物を眼前に突きつけられてますます身動きできなくなった咲穂の左右の足の間で、黒田が腰を進めてきた。
（や、やだ……こわい）
宮脇クン……たすけて……！
身体がガタガタと震え始めた。
「ここだよ。ここに挿れてやんな」
片手にカッターを握ったまま、蘭子は指で肉びらを引っ張り、膣口をはっきりと露出させた。
「常盤。暴れるんじゃないよ。これ以上どこも切られたかあないだろう？」
「うへへ……ここだな」

えっちシーン試し読み
ここからスタート！

黒田は目を輝かせている。
膣口に、赤黒く張りつめた亀頭があてがわれた。
（こ、こわい！　いやああ！）
これまで一度も体験したことのない感触だった。女子の身体でたぶんいちばんやわらかいところに、男の子の凶悪そうな肉棒の先端が触れていた。
「お、おねがい。わたし、初めて、まだだから……だから、しないで。おねがい。女の子の気持ち少しは考えて。ね？　やめて」
「咲穂ちゃん、マジで初めて？　そんなこと言われたらよけいやめられねえよ」
「そ、そんな」
恐怖と緊張で息ができなくなり、全身から血の気が引く。
毛穴という毛穴が収縮して鳥肌が立つ。
（や、やだ！　男の子のものが、ほ、本当に入ってくる……ッ！　やだぁ）
めりぅ……。
「う」
武骨な肉棒に押されて処女膜がゆがみ、かたちを変える。ヒトデ形の小さな穴を残して発達した肉厚のひだの輪が亀頭にぺたりと張りつき、限界まで伸びきっていく。
輪状処女膜の上と下はまだ持ちこたえていたが、右と左でほぼ同時に突き破られていく。

「痛あああいッ……ッ」
痛みにまた意識が瞬間飛んだ。
裂け目からとろりと、重いオイルがこぼれるように鮮血が洩れ出した。
めりぃ……。
「あ、あ、また……痛いッ」
今度は、輪のななめ上側が爪の剥がれるような痛みとともに裂けた。
黒田はそこで動きを止めていた。それ以上腰を進めようとはしてこない。
「くおおっ、たまんねっ。お、おれの亀頭の先に熱いもんが引っかかってきて……く、まだおれを拒んでやがるか？」
そうだった。
亀頭はまだ半分、裂けかけの処女膜に引っかかっていた。
「うっうっ痛っ……も、もう無理にねじこもうとしないで……っ！」
宮脇くんとは今度の日曜日にもデートする予定になっていた。それなのに今、宮脇くん以外の男子とこんなことになってしまっている……罪の意識が咲穂を苛む。
くびれた腰は床の上でのたうつが、上半身も下半身もしっかりおさえこまれてるので、ろくな動きにはなっていない。
「おいおい、暴れんなよ。今すぐおれがもっと根元までブチこんでやるからよ」

「痛い……ひどい。わ、わたし、初めてなのに。本当に初めてなのに。こんな乱暴なし方で、初めてだなんて……ひどすぎる」
「うっせえんだよ。咲穂ちゃんみたいないないボディ前にして、落ち着いてやさしくロストバージンさせてやれる男なんかこの世にいねえだろっての。おっ、おっ。もうやべえ」
黒田は腰を先に進める前に、亀頭をブワッと膨張させた。ピンポン玉みたいな硬さと丸みの亀頭肉に、輪状処女膜が裂けかけのままいっそう密着した。
「や、やめてって頼んでるのに……うっ……痛ああい」
「出るッ。咲穂ッ」
「やだあああっ！」
悲鳴が終わる前に、不良生徒はどっくどっくと射精を始めていた。
（や、やだあ……出されて、る……の？）
咲穂にとっては気が遠くなるような長さに感じられたが、実際には射精は十秒にも満たなかったろう。
（宮脇くん……宮脇くん……ごめん。わたし、出されちゃった、みたい……）
「ふうーっ」
不良生徒がぐったりとなった咲穂の下腹部から引き抜くと、すかさず志木蘭子が覗きこんできた。

「ウフフフ。半分裂けかけてるけど、まだ完全じゃないわねえ。出血が少ないのもその証拠」
うれしそうにそんなことを言うのだ。
「おい、どうだったんだ、黒田？」
「おう。お店のおねえさんの肉と違って、なんか、硬いんだ。ぴっちりしてて、入口なんか、もう狭すぎ……奥まで行けなかったぜ。畜生」
仲間に訊かれてそう答える黒田。咲穂の処女膜を完全には破りきらないうちに爆ぜさせてしまったのをくやしがっている。
しかし咲穂にとっては犯され、中で出されたという事実に違いはなかった。
「ようし、次はおれだ！」
下半身裸になって待機していた花村（はなむら）という男子生徒が、黒田と同じように咲穂の足首をがっしりとつかんだ。
「もっ、もういやだわっ！」
カッターの刃をかざされていることもつかの間忘れて、咲穂はまた抗い始める。
しかしそれは男子たちの怒りを買っただけだった。
「おい咲穂ちゃん、なんだよ！　黒田にはやらせて、他の奴にはやらせないのかよ！　お前、黒田のことが好きだったのか！」
怒り出した男子たちに組み伏せられて完全に身動きできなくなった。

「やだったら、やだあ……」
咲穂は顔いっぱいに不快感を表しつづける。それには男子たちでなく志木蘭子も怒りを露わにした。
カッターナイフが今度はひと握りの黒髪を切り取った。
「常盤。あんた、髪の毛ズタズタに切り刻まれたいかい？　勝手に自分だけいい気持ちになっておいて、なんだよその態度は？　いやがってんじゃないわよ」
「わたし、気持ちよくなんかなってない……ひっ！」
咲穂がやめてと声を上げるよりも前に、太ももを抱えこんだ花村が腰を前に進めてきた。
「もういやあっ……！」
どす黒い亀頭にチョンと触れられて、熱したフライパンに触れたみたいにビクッ！　と咲穂の下腹部が震えた。
（やめてえ……）
咲穂は目を閉じた。いやがる腰がしっかりと抱えこまれ、膣口はまた硬いものを無理やり咥えこまされる。
（やだあ）
こじ開けられていく感覚があった。
裂けかけの処女膜は侵入してくる凶悪なペニスをけなげに弾き返そうとしてくれた。

咲穂と同じように花村もまた眉を寄せ、顔中に脂汗をしたたらせている。
「くおっ……キツ」
「やっ……痛っ」
咲穂の腰がうねる。背中は畳の上を這いずって逃れようとする。しかし男子たちに群がられた身体は実際には少し動いただけだった。
処女膜の裂け目が広がっていく。
「や、やだ、中に、入ってこ、ない、で……痛いッ」
黒田の時にはまだ無事だった上側の輪状処女ひだが、強引に引き裂かれていく。
薄いあぶらとり紙に指で穴を開けて引き裂くような音が胎内から響いて、咲穂の耳に届いた。
ぷつ……っ。
「あっあ痛い」
もう一回。ぷつ……。
「……む、無理に、しないでっ！　い痛ああいッ」
下から張り出していたいちばん厚いヒーメンもついに断裂した。
「くううッ痛い！」
処女膜に通っていた神経は次の瞬間には、亀頭の先端の硬さではなく亀頭のエラの張り

出し具合を感じていた。処女膜の奥の未開の膣肉の輪が硬い亀頭に拡げられる！
「すげえ……咲穂ちゃん……ぷりぷりの熱いお肉におれのちんぽがきっちり包まれてる……」
「うう……やだあ、ご、ごりごり、しないで……痛い、擦らないで」
花村はそのまま一気に自分の腰を進めようとした。が、その前に。
「うおおッ。咲穂ちゃんの中っ。熱すぎっ！　そ、それに、ザラ目の砂糖を敷きつめたみたいになってねえ？　む、無理だこんなの！」
咲穂の中で、鶏卵のように硬いまま、亀頭がもりもりっ、とふくらんだ。
「やだ痛ああっ！　やだああっ！」
「うおっ出ちまう！」
心臓の激しい鼓動にも似た振動がどっくどっくと、咲穂の膣肉輪を容赦なく揺さぶった。どろどろしたものが撒き散らされていく。射精の瞬間にグッとその径を増したエラに押されたまま、咲穂の膣粘膜は内側から花村の亀頭のかたちに拡がっていた。
ペニスの発作のしゃくり上げるような動きを受けて、裂け残っていた最後の処女ひだが痛みを発しながらとうとう、ぷつりと裂けた。咲穂は顔を苦悶にゆがめてうなるような声を出す。
「ぐぅ！　いったあい……っ」

「ほーんと、すごいイキッぷりだったわね、常盤さん。あんた、こんなエッチでイキやすい身体じゃあ、誰のお嫁さんにもなれないわよね。だって絶対、一人の旦那さんじゃあ満足できないもんね」

世の中、そんなに我慢強い男なんてそうそういないからね、と言って志木蘭子は笑う。

「旦那は満足して出しても、あんたはいっつも欲求不満。大勢の強ーい男に嬲られないと満足できない身体なのよ、あんたは。フフフ。あんた一生、一人の男とのしあわせな結婚生活なんか送れないよ。こうやって今日みたいにみんなにまわされないと満足できないのさ。ああ愉快だ」

さっきは咲穂に対して、異常なわけではなく普通だ、などと甘くささやきかけたくせに、態度を一変させて揶揄してくるのだった。

蘭子はまた携帯を手にした。

「フフッ。もう一回、記念撮影しようね」

ん、と首をかしげる。

「あらっ、もう膣口、閉じちゃってるんだね。ずいぶん締まりがいいのね」

志木蘭子はラグビー部員の一人に携帯を渡し、アタシが指で拡げるから、写真を撮りなさい、と命じた。

まず大陰唇がおさえられ、外側の扉が開かれる。

こっそりノーン 試し読み

「や……」

「や、じゃないんだよ、常盤さん」

指先でこじ開けられて、亀裂からクリーム混じりの濃い愛液がどろりとこぼれると、それに呼応したかのように涙もこぼれ、咲穂の頬をつーっと流れる。

「おやおや。常盤さんの垂れ流した汁で男の子たちのザーメンはけっこう流れちゃったかな？　うわっ、それにしてもすごい匂い。ザーメンの匂いじゃないよね、もう。常盤さんの匂いだあ。饐えたチーズみたい。男子はこういうの好きなのかな？　アタシはいやかも」

（わ、わたしだって、いやだ。は、恥ずかしい……）

愛液と精液とクリームにまみれきった凄惨な状態の陰部がぱっくりと曝け出されている。クリトリスは丸剥けで、いまだに快楽の深い余韻にズッキン、ズッキン、と脈を打っている。小陰唇はふやけて面積を増し、肉真珠の脈動に合わせてぶるっ、ぶるっと震えていた。

それでも可憐な膣口だけは、蜜汁をこぼしつつもなお口を閉ざしていた。蘭子が指先でそこをこじ開けて中身を晒させると、膣肉輪は奥まで充血しきっていた。鱗片のような微細なひだひだの一片一片が官能の朱に色づいてヒクついている。

そして、

「うンっ……」

と強い余韻に襲われて咲穂が声を上げ腰を揺らすそのたびに、ひだひだの付け根あたり

からジュワッと白みがかった蜜液が分泌される。
「すげえ……」
「咲穂ちゃんのおま○こ、やべえ……」
ラグビー部員たちが口々に嘆声を上げた。
「あんたたち、まだ犯り足らなければ、犯ってもいいんだよ」
蘭子は冷酷にもそんなことを言い放った。
「そんな。も、もうわたし無理……身体、無理……」
「無理なもんか。常盤さん、これだけのエッチなボディしてるんだから」
相撲取り体型の不良女子生徒はセロテープを使って、小陰唇を開いた状態で固定させてしまった。
「あんたがイキまくる姿見て、男子たちまた、犯りたくなったみたいなんだわ。責任取って相手してあげて。ね？」
「無理……もう無理……」
「甘えてんじゃあないわよ！」
突然怒鳴ると、蘭子はスノコにつながれていた咲穂の足のロープだけを解いた。
「じゃあみんな、犯ってあげて」
「おれ、裸にした咲穂ちゃんの腋の下舐めるのが夢だった！」

「おれも！」
「おれは咲穂ちゃんの陰毛をしゃぶるのが夢だった！」
ラグビー部員たちがまた、素裸のEカップ生徒会長を囲んだ。さっきとは逆の順番ということなのか、岡田という不良生徒が無造作に咲穂の足を持ち上げ、挿入してくる。
「おれはやっぱりブチこむのがいいな！」
「……んっふ……！」
愛液とニ〇アがほどよい潤滑液となっているようで、咲穂の狭い膣は先ほどの輪姦の時よりもずっとスムーズにペニスのかたちに拡がり、根元まで男子の男根を呑みこまされていく。
ところが。
（い……痛く、ない……？）
挿れられただけで、身体中を灼き尽くすような絶頂感がやってきた。
（ダ、メ……）
目を固く閉じ、くちびるも可能な限り引き結んで、咲穂はこらえようとした。
こらえなければ精神が保たない、ということが直感できていたから。
肉体にも限界はあるのだろうが気持ちにも限界がある。それがわかるから。
あと数回、いや、へたをすればあと一回、克己心を失って昂りに身を委ねてしまえば、

もう完全に自分は終わりだ……。

「す、すげえ咲穂ちゃん。さっき以上にすごい！　さっきはなんだか硬くてキツくてすごかったけど……今度は吸いこみながらひだひだがからみついてくるうっ！」

（ああ……わ、わたしも、さっき無理やり乱暴された時と、違う……！）

たのもしい男根で貫かれ擦り上げられる快楽は、クリームを塗りたくられ膣ひだ一枚一枚をもてあそばれるのともまた質が違った。犯しながらその男子は覆いかぶさって、水泳部エースのなめらかな喉元をぴちゃぴちゃと舐めてくる。唾液を塗りたくり、皮膚をしゃぶり尽くしにかかってくる。

「す、すごいよ、咲穂ちゃん！　咲穂ちゃんをおれも気持ちよくさせてやりたいよ！」

「い、いやっ、あなたなんか、好きでもなんでもないんだから……んん！」

（いやっ、こ、擦らないで……おちんちん硬すぎる……んッ！　んっ！）

三度、四度と、短いアクメの小爆発が咲穂を襲った。

咲穂はそれに耐えた。

自分でありつづけるために。

びくっ！

（硬いのわたしもう無理……んっんっんっ！）

小爆発の六度目までは咲穂は耐えた。

虫歯の痛みをこらえるような表情になって、イクまいとして、自分を抑えた。
「何、この子……まだがんばってるの……？」
ここまで嬲り尽くされたあげくのこの抵抗に、蘭子は目を丸くしていた。
しかし、それが咲穂の限界でもあった。
七度目の爆発がやってきた。
そこまで耐え抜いたことが逆に激しい崩壊を招くことになった。
びくびくびくんっ！
膣口が勝手にぎゅっと締まり、粘膜の波打ちが始まっていた。
ぎゅっと寄せていた眉がゆるみを見せる。
「わたし……い、い、いううッ！」
肉体はもうイクのは無理だと悲鳴を上げていたが、精神の方が抑えが効かなくなっていた。すでに二回出していることで我慢強くなっている岡田の若竹は、女子水泳部エースの肉体の限界など無視してさらなる頂上に持ち上げていく。
たくましい男根が根元まで埋めこまれて小さく揺さぶられると、当たる角度が少しずつ変わる。そのたびに鋭い性感が走った。何もかも忘れてしまえるほどの炎が炸裂した。おっぱいから骨の隅々までたっぷり栄養とカルシウムが行き渡った黒髪全裸水泳部員の腰や太ももが健康的に弾む。

びくんっ！　びくびくんっ！
「ふぁうううッ……ッ」
脂汗を流しながらも岡田は、射精をこらえていた。
「あれ？　もしかして、咲穂ちゃん、もうイッてる？　まだ三周目は一人目だよお？　おれ、まだイッてないんだよお？　どうしちゃったの、咲穂ちゃん？　なんかうねうねしたものがキュッキュッ締めてきてるっ」
「お、奥、突かないで……そんなにされたら……ふううッ……ふううッ！」
うめきながら汗みどろの首すじをグッと反らせる咲穂。玉のような汗をいっぱいに浮かべた額に黒髪が張りついて、初産を迎えた妊婦のような凄艶な色気を醸し出していた。
「ほんとにもうイッてるわね、この子……アタシの指より、あんたたちのちんぽの方がいいのかな」
「うっう、まだ締めてくる、さすがに、キツいかも……な、なんか咲穂ちゃん、おま○こだけ別の生き物みたいにくねって締めてくる……ッ……だめだッ」
岡田は次の瞬間、どくっどくっどくっと射精した。
「なあ咲穂ちゃん、孕めよ……おれが貴重なザーメンを咲穂ちゃんのためだけに中出ししてやってんだからな……孕まなかったら承知しねえぞ。な、返事は？」
射精されながら咲穂は。とうとう。

こくんとうなずいていた。
（もう、わたし……本当に身体が全然、言うこと聞いてくれない……ダメになっちゃった……ダメな子になっちゃった）
不良生徒は射精を終えると、ゆっくりと離れる。
「もうそろそろいいかな？　ほどいてあげなさい」
蘭子の指示で、イッたまま半分意識を失いぐったりとなった黒髪の美人生徒会長は両腕のロープも解かれ、スノコから解放された。
もう咲穂にはろくに体力が残っていなかった。
「どうしたの、生徒会長さん？」
その場にうつ伏せに倒れこんだB八十八・W六十・H九十センチの早熟れボディが、蘭子に引き起こされる。
（もう……無理……）
それまでの『もう無理』とは意味合いが違っていた。
もうこれ以上レイプされるのは無理、だったのが、もうこれ以上意地を張りつづけるのは無理、になっていた。
（もう……わたしダメな子なんだ……）
咲穂はこころの中でつぶやいていた。

（宮脇くんにきらわれちゃう。宮脇くんを失望させちゃう。宮脇くんを裏切っちゃう）
けれど。
（気持ちいいんだもん……しょうがないじゃない……）
気丈に抵抗しつづけた美人生徒会長の諦めを目ざとく見抜いたのか、蘭子がまたウフフフと笑いながら顔を寄せてくる。
「どうしたの、常盤さん？　言ってごらんなさい。どうされたいの？　どうなりたいの？　今いちばんして欲しいことは何？」
「……、く、なりたい……」
「え？　何？　はっきり言ってくれる？　聞こえないから」
もっと気持ちよくなりたい、と咲穂は口にした。もっともっとイキたい、と。
「……もっと、して……」
カーッと頬が赤くなるのがわかった。
でも、どんなに恥ずかしくても、口にしないではいられなくなっていた。
男の子のおちんちんが身体の中でブワッと大きくなって出される瞬間がたまらなく気持ちいいのだと。もっと、もっとそうして欲しいのだと。何もかも忘れてしまいたいのだ、と。
「ふうん？　そうなんだ？　あれだけいやがってたくせに、あれだけバタバタ抵抗したくせに。どういう風の吹き回し？　ねえ？　言ってごらんなさいな」

「わたし……わたし……弱い女の子だから……気持ちいいのが好きで、我慢できないから……もっと、もっと、気持ちいいこと、みんなにして欲しいから……」

それを聞いて。

「も、もう、おれもたまんねっ！」

「咲穂ちゃああん！　かわいすぎっ！」

「もう順番なんかいいよな！」

砂糖に群がる蟻のように、全員がいっせいに飛びかかってきた。

「うわっ！　咲穂ちゃんの身体に擦りつけてるだけで、ちんぽ気持ちいい！」

おれもおれもとラグビー部員たちが群がって、思い思いに自分の下腹部を水泳部エースの健康美溢れる裸体に擦りつけ始めた。太ももに。腰に。おっぱいに。頬に。髪にも。

「うおお、咲穂ちゃんの身体、こうやって抱きついてるだけで気持ちいい！」

（ああ……わたしも、男の子に抱きつかれると、気持ちいい……）

口にも突きこまれた。

咲穂は、噛もうとはしなかった。

積極的に舌こそ使いはしなかったものの、口中にどれだけごしごしと擦りつけられても、もう反抗的な態度は取らなかった。

「うおっ、ほんとだ！　咲穂ちゃん、さっきと全然違う！　な、なんか、奥の方のひだひ

だ全部がおもちみたいにねばねばからみついてきやがる……っ」
　挿入してきた鳥本がさわぐ。ほっそりしたうなじとたっぷりしたおっぱいを備えた美人生徒会長は、ペニスを受け入れたことでたちまち燃え上がっていく。
（……ッ！　わ、わたし、か、身体中、べとべとにされて、こんなに、き、気持ちいいなんて……ッ！）
　牛乳をたっぷりとたたえたような温かくて重たい乳房も、バスケットボールのように見事な丸い尻も、男子たちの愛撫と唾液を受けることで張りと輝きをいっそう増していた。勃起しきった乳首や剥けきったクリトリスが男子たちの身体に擦れるたびに、甘い痛みと心地よい痺れが持ち主の身体を貫いた。
　小陰唇はあまりにも激しい輪姦のせいでか褐色の度合を一挙に増していった。しかしそれが微妙なよじれ具合と相まって、かえって見る者の劣情をそそった。白桃色だった複雑な貝肉の層も、いそぎんちゃくか何かのような微細なひだの一つ一つがいっそう濃く色づき、ぬめぬめと蛍光灯の光を反射させて、常盤咲穂の裸体美をより際立たせた。
　男子たちがそれを見て、簡単に萎えるわけがなかった。
「さ、咲穂ちゃんのおま○こ、おれのちんぽにねっとり吸いついて、離れないッ！　ちょ、ちょ、待ってよ、たまんねっ！」
「わ、わたしも、た、たまらない、と、鳥本くん、もっとやさしくして……わたしの中で、

鳥本くんのが、ごんっごんって響いて……っ！」

子宮から噴き上がった炎は轟音を上げて全身に広がり、ぱちぱちと音を立てて手指や足指の先端まで灼き尽くした。身体の中でぶどうの房が踏み潰されていくかのように、糖分をたっぷりと含んだ果実が身体の中で幾度も幾度も爆発し、快楽が神経という神経に沁み渡った。喉がかれてしまうまで咲穂は何度も何度もさけんだ。自分では大声で絶叫しているつもりでも、もはや咲穂のよがり声は部室の外には届かないくらいの弱々しいものでしかなかったのだが。

「咲穂ちゃんすごいよ！　おま○この肉が泣いてるみたいに汁をぐちゃぐちゃ噴き出しながら、おれのちんぽに食いついてくる……も、もう出るッ！」

鳥本の次にはすぐに美濃村がまたがる。次には玉州が。次には千田が。

全裸の水泳部エースのむっちりと実った肉体を男子たちは代わる代わるに征服した。

やがて咲穂の喉はダマを含んだ精液のぬめりになかば塞がれて、呼吸をつなぐのがやっとという状態になった。もう咲穂はいっさいの逆らいは見せず、すべてを十一人の男子たちに委ねきっていた。好きなように挿入させ、好きなように射精させていた。

（あのとき、志木さんの後についてこんなところに来なければ……）

こんなことにはなっていなかったのだろう、と思う。

あのとき水泳部の練習をつづけていれば。

そうすれば自分は、宮脇くんとおつき合いしつづけて、ひょっとしたら近い将来宮脇くんに、穢れを知らないままの身体を捧げていたかもしれない。

今日体験したような快感は得られないかもしれないけれど、でも宮脇くんの方がずっとやさしく抱いてくれるはずだった、と咲穂は思う。

でも、もう遅い。

こんな凄まじい快感を知ってしまっては。

ここまで穢されてしまっては。

もう宮脇くんに顔向けできない身体になってしまった。

（ごめん……ごねんね……さよなら宮脇くん……）

気持ちの揺れが肉体の揺れを後押ししているのか、汗は退くことがなかった。

汗だけではなかった。粘ついた涙が流れ始めた。詰まった精液を押し戻すほどに鼻孔からも流れ出た。おっぱいから出た汗は白い精液を溶かし、母乳そっくりのヌルヌルのすじとなってお腹や脇腹に流れていく。腰や太ももはビクッビクッと断続的に引き攣り、退いたはずの絶頂感がまた激しい発作となってぶり返してきた。あれからずっと剥き上がったままのクリトリスは、脈打ちに合わせてひりひりと痺れつづけている。

肉欲だけで生きる牝に堕ちきれば、宮脇くんのことも忘れられるのだろうか……と咲穂は思う。

「なあ咲穂ちゃん。お前、もう立派なセックス奴隷だよなあ！　ひゃはは！」
「うっイク……！」
そんな蔑みのことばを投げかけられたただけで、肉棒を強引に含まされた膣肉がまたきりきりと収縮した。子宮が疼き、中に詰まっていた甘いぶどう果実がまた一つつぶれ、膀胱や腰骨に向かって砂糖漬けされたような痺れが飛び散る。胸のミルクタンクの奥も切なく疼く。天井から太いロープで引っ張られてでもいるみたいに、腰がせり上がった。もう破瓜の痛みなど完全に消え去っている。
「うっ……うっ……！　また、胸が、身体が、勝手に……！」
ひくっ……ひくっ！
（やだ……気持ち、いいよお……）
咲穂はいつしか、極上の甘いお菓子を頬張った子どものようなうっとりとした表情を浮かべていた。
「……ああ今っ……また今っ」
男子の体重の下で弱々しく腰が痙攣するたびに、肌を刺す真冬の強風のような鋭い快美感に見舞われていた。好きでもなんでもない、野獣のような男子に群がれて犯されているのに、どうしてこうなってしまうのだろうか、と思う。ポルチオをキチキチに漲った海綿体で容赦なくえぐられ、粘膜のひだひだの裏側までいやというほど擦り上げられ、ライフ

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/